

第二章 マイフレンドの甘美で苛烈な依頼

かつてないほど、学校に行きたい気持ちで満ち溢れている。初めてできた友達の顔を早く見たいし、会っていろいろ話したい。

早々に支度を終わらせ、意気揚々と歩き始める。一人なのは相変わらずだが。

ギャルゲやライトノベルでは、玄関を開けるとヒロインが待っていてくれるのが鉄板だ。

だがしかし、ここは現実——一緒に登校する女の子がいなければ、出会ったときから好感度マックスな異性もない。

僕のそばにいるのは、趣味を同じくした友達だけだ。

教室に着くと、今まで見向きもしなかった場所に視線をやる。そう、咲ノ宮さんの席に——

文学少女らしく、ゆったりと本を読んでいた。そういえば、昨日も読書に耽っていた

たよな。

メガネ地味娘の読書姿ほど、素晴らしいものはない。そこだけ、三次元から乖離した世界、二次元のような美しさを放っている。ずっと見ていても飽きない。いつまでも眺めておきたいものだ。

「ふふっ……」

こちらを向き、微笑んだ。極上の癒しが詰められた、天使の笑顔だった。その表情だけで、ご飯三杯はいけそう。

あいさつの意図を込めて手を振った。周りに人がいっぱいいるせいで、さすがに声をかけられなくて。

お返しにハンドサインを出してくれた。これが、友達との交流なのか。

そうして、充実した気持ちのまま、お昼休みを迎えた。

せっかくだから一緒に食べようと考えたが、肝心の咲ノ宮さんがどこにも見当たらない。

彼女の席は、いかにもなギャルたちが占拠している。怖くて、どこに行ったのか聞けない。いつも通り、ぼっち飯でいいか。

一人での食事は、飢え死にしないための予防——ただの栄養摂取にしかない。二人以上だと、新たな価値も生まれてくるというのに。

仕方ない。早く昼食を済ませて、校内を散歩するか。お前の席ねえから。邪魔で机を合わせられないだろ、さっさとどっか行けよ。そんな眼差しを向けられているし。何もしないのに、彼らからしたら僕は不快らしい。

さて、どこで暇を潰そうか。図書室で仮眠？ 個室トイレにこもる？ そうだな、こは自動販売機で飲み物でも買うか。中庭だったよな。

ガコンと音を立てながら、お目当ての飲料が吐き出される。子どもの頃からよく知っている甘さと、大人になって初めて体験する苦さが混ざったカフェラテだ。

その旨さを味わおうとしていたところ、ようやくあの人に出会えた。

二人掛けのベンチに一人でちょこんと座り、またしても本を読んでいた。声をかけ

ようか躊躇ったが、友達なんだし迷う必要はないだろう。

「おはよう、咲ノ宮さん」

こんな時間に「おはよう」はどうかと思うが、友達に「こんにちは」って言う方がおかしいだろ。

「ん？ あら、おはよう」

挨拶は基本。昔の書物にも、そう書かれている。

「もうご飯食べた？」

ごく自然に、隣に腰掛ける。我ながら大胆な行動だ。それでも、嫌な顔ひとつせず、受け入れてくれるからありがたい。

「ええ。これを——」

彼女にとっての昼食を出してくれた。飲むだけで朝のエネルギーチャージと印刷されたゼリー飲料だ。

若い内からそういうものに手を付けているなんて、信じられない。というか、今は昼だぞ。朝のエネルギーじゃ足りないだろ。

「もしかしていつもそれ？」

無言のまま首肯した。

「朝ご飯は？」

「食べてないわよ」

「ダメだよ！　しっかり食べなきゃ！　栄養足りなくて倒れちゃう！」

過保護の親のような口調で、語気を強めて叱ってしまう。さすがにまずかったと反省し、すぐさま言い改める。

「お母さんはお弁当作ってくれないの？」

「母さんは忙しくて……」

「じゃあさ——」

「父はいないの」

いない——その言葉が、胸の奥深くまで突き刺さる。

良い感じで話そうとしていたのに、重い雰囲気になりがちがやられてしまう。

「そうじゃなくて、生まれる前に別れたみたいなの」

死んだわけではなく、離婚したらしい。

だったら、忙しい理由にも納得できる。働き手で、お弁当を作る時間さえ取れない

のだろう。

そして、父親だった人に憤りを覚えてしまう。子を育てる義務を放棄するなんて、おかしいんじゃないか。

恵まれた家庭のせいだ、ついつい同情してしまつて。

「同情とかはいいから。……すごく楽しいもの」

苦しい生活ではないようだ。幸せそうな表情で、強がりではないことはすぐにわかる。家族の違いから、勝手に差別していた自分が憎たらしい。

ただ、過去を思い出したのか、一瞬だけ陰りが見えた。その辛そうな顔が、脳裏に焼き付いて離れなくなる。

これ以上、嫌な気持ちを掘り起こさせてはいけない。家族について知る機会があるならば、自らの意志で話してくれるときだ。

「……………」

「……………」

ここで会話が途絶えてしまった。もうネタが浮かばない。こういうとき、いくらでも話せるリア充が羨ましくなる。

咲ノ宮さんは本に目を落としている。沈黙が悪いわけではないし、読書も悪いことではない。それでも、会話を優先したくなって……。

「その……何読んでるの？ よかったら教えてくれない？」

読書中の人が、十中八九受ける話を振ってしまふ。残念なことに、この質問は不快にさせるおそれがある。

僕自身、クラスを牛耳っているボスから、同じことを言われた。本能的恐怖から誤魔化そうとしたけれど、あっけなく奪われ、きわどい格好をした女の子が表紙絵のライトノベルが晒された。彼が、その次に取った行動は、容易に想像できるものだった。あのとき、心に深い傷を負った。もし、咲ノ宮さんにもこういう体験があったら、また過去を思い出させてしまふ。

さっきの発言を訂正しようとしたところ。

『ヤンデレ妹に四六時中愛される監禁性活』

「え？」

「だから、『ヤンデレ妹に四六時中愛される監禁性活』よ」

表紙を隠す目的で覆われているブックカバーを外して、先ほどまで読んでいた本を

見せてくれた。

可愛さと恐ろしさが混合した女の子が描かれていた。その瞳は色を失っていて、正気ではなさそうだ。

特徴的な服装で、あからさまに男を誘うポーズをしている。よく考えなくても、性欲に火をつけるための服なのかもしれない。

余裕で大人向けの小説とわかるものだった。それをこんなところで読んでいたというのか。おおかた、昨日の放課後と今朝も、これを読んでいたのだろう。

文学少女ではなく、性文学少女だったとは。

「もしかして知らないの？ 最近発売されたばかりの新刊なんだけど、タイトル通りの内容でね、兄が大好きでたまらない妹がいて、もう我慢できないってとうとう襲っちゃうの。勉強を教えてもらったお礼に、アイスティー出してあげるんだけど、それに睡眠薬が盛られててっていう感じで。初めは兄弟だからって拒んでいたんだけど、次第に溺れていって……。監禁という文字通り、手足を拘束したり、首輪をはめたり、監視カメラをつけたり、何もかも管理して、ほんとヤンデレなのよ。でもでも、ナイフを持って殺しちゃうようなヤンデレじゃないからね。それで、兄のことを兄さんっ

て呼ぶの。ここ重要！もう続きが気になって……。似たような展開を前書いていて、そのときは妊娠エンドだったから、今回はどうなるのか。やっぱり同じなのかそれとも……。終わったら貸してあげるわ。参考資料にもなると思うし」

唐突に始まる作品説明と、マシガン並みの感想。挙句の果てに、後で貸してあげるとまで言ってきた。

どうやら、特定の話題になると饒舌になる人だったらしい。またしても、共通点を見つけてしまう。

意外な姿に困惑と歓喜の両方が押し寄せているけれど、お礼だけはしなければ。さっきの質問は、趣味のあう友達だからこそ、答えてくれたに違いない。

「普段こういうの読んでの？」

流れが掴めたら、ここぞとばかりに会話を広げていく。

「もちろんよ、特にこの作家先生は好きで。他にもヤンデレものをいくつか書いてて、ヤンデレならではの愛情表現が最高なのよ。その愛情にやられる瞬間が興奮もので、まあ、逆転があるのは商業だから仕方ないとはいえ……。それで、後日談が魅力なの。前なんか子どもを孕んでるように思わせる描写があってね……」

何かのスイッチが入ったみたいに、喋り続ける咲ノ宮さん。圧倒されてしまうが、ただこれだけの作品を愛しているのかが伝わってくる。

もっと聞いてみたいけど、場所が場所だ。

「その……気持ちはわかるけど……もうちょっと声下げようよ。周りが……」
オンになったスイッチをオフにしようと試みた。おかしい噂をされたら困る。

「あ——失礼したわ」

今の状況を理解してくれたのか、オタクから地味娘へと姿を変えた。

「そういえば、昨日細川さんと楽しそうな話してたじゃない」

「なんでそれを……」

「ごめんね。別に覗こうとしたわけじゃないの。二人の会話が流れてきて……」

フォローしている人同士のリプライは、タイムラインに表示されるんだったな。ということは。

「咲ノ宮さんも細川さん知ってるの？」

「ええ、よく感想言ってくれるし、前のコミフェのときは差し入れ持ってきてくれて……」

「会ったことあるの！？　どんな人だった？　顔は？」

視線を外されて焦ったが、すぐに戻してくれた。なんだか校舎の方を向いていたよな。

「そういうの良くないわよ。知ったところで何も得にならないし、本人も迷惑でしょうね、あのときはほんと申し訳ないことしたわ。ごめんなさい」

「いや、もうあれはいいって。そのおかげで咲ノ宮さんと友達になれたんだし……」
「ありがとう。とにかく、どこ住みとか聞いちゃダメよ」

もっともなことだった。リアルがわからなくても、十分すぎるほどコミュニケーションを取れているじゃないか。

ただの好奇心で中の人を探ろうとするのは、相手にとって迷惑極まりない。関係が悪化するどころか、繋がりを遮断——ブロックされることだってある。

「悪いことしちゃったなあ」

あれ？ 昨日の会話？ それって、あの話じゃないか！

「リプライ見てたんだよね？」

「掘ってもらうのがどうこうってのよね？ それで、あの作品どうだったの？」

「そ、それは……よかった……」

俯きながら小声で伝える。新たな性的嗜好を見抜かれた気がしてならない。

「へえ……次、そういうの作ってみようかしら？」

「楽しみにしてる……」

「ふふっ、ありがとう」

こうして、僕たちのちよっと変わったお昼休みは終わりを告げる。

最後に、大量の勇気を消費して、明日から二人でお昼ご飯を食べようと約束した。あと、コンビニでおにぎりを買うだけでもいいから、ゼリー飲料だけはやめたと指摘しておいた。

下校時刻——今日は、遅くまで残る必要もない。教室を出ようとしたところ。

「その……一緒に帰らない？」

なんと、咲ノ宮さんから誘われた。

「ダメかしら？」

「そんなことない。すごく嬉しい」

「ありがと。それと、ちょっと職員室に寄っていい？」

「いいけど……呼び出された？」

「私がそんな不良に見えるっていうの？ 提出物よ」

「ああ、昨日書いたものね」

昨日の放課後、僕と考えた学級通信の下書き。それを提出するために、職員室まで足を運ぶ。

「行ってくる。待ってて……」

「もちろん。僕は……咲ノ宮さんの友達だからね」

用事があれば、しっかりと待っていてあげる。これが友達関係ってものだろ。

職員室前ということもあって、何もしてないのに、なんだか悪いことをしてしまった気分だ。目の前をたくさんの教師が通っていく。授業を受けたことがある教師がいれば、まったく接点がなく、名前も知らない教師もいる。

「こんなところでどうした？」

「え、あ……えっと、友達を待っていました……」

こんなところにいるんだ。声をかけられるに決まっている。予想していたとはいえ、

いきなり話しかけると、どうしてもってしまふ。相手があの男性教師なんだから、よけいに緊張する。

「そうか、友達は大切にしろよ」

意外な言葉に戸惑うが、いつもの流れで対処する。

「ありがとうございます」

そうして、何事もなかったかのように職員室に入っていた。

先ほどの彼は、僕たち三年次の主任を務めている太田先生だ。細身の体にメガネをかけていて、先生の中でもイケメンの部類だろう。ちなみに、現代文の担当で、授業内容が大変わかりやすい。

厳格な雰囲気ので、一部の学生からの評判はいまいちらしい。校則にうるさいわけでもないのに嫌われていると、不憫に思ってしまう。

彼曰く、梓から外れたとしても、本人が心から望んだ行動の場合はそれでいいらしい。後悔のないように、したいことをして生きろ。後ろめたさがあるんだったら、今すぐやめておけると話していた。教師の言葉なんてすぐに忘れてしまふのに、なぜかこれだけは覚えている。

授業がわかりやすく、僕たちのことをよく想っていて、自分の考えを貫いている。やはり、凄腕教師に違いない。

そんなこんなで数分後、咲ノ宮さんが戻ってきた。

「……ありがと、待っていてくれて」

「いや、ぜんぜん待ってないよ。それよりどうだったの？」

「良かったって。これもキミのおかげね」

どうやら、学校が満足する内容になっていたようだ。

「もう帰る？」

「そうね。帰りましょ」

咲ノ宮さんとの下校も、今日で二度目だ。

言いたいことがあったのか、僕たちだけの世界になって、すぐに口を開いてくれた。

「また手伝ってほしいことがあるんだけど」

「えっと……どんなこと？」

友達のお願いだ。快く受け入れるに決まっている。

「それは……文字に残るものの方がいいだろうし、夜までにツブヤイターで伝えるわ

ね」

「ここじゃ無理ってこと？ ……わかった。それじゃよろしく」

顔を合わせてじゃ難しいことはたくさんある。無理矢理聞き出す必要もない。サキユの宮さんが教えてくれるまで、楽しみにしておこう。

その後、適当な会話を繰り返していると、駅まで着いてしまう。初日より沈黙時間は短かった。

テストの話をしないで、お昼休みの続きを聞けばよかったなあと悔やんでしまう。そうしたら、もっと仲良くなれたはずなのに。

帰宅してしばらく経つと、サキユの宮さんからメッセージが届いた。

それは思ってもいなかったもので、体から緊張の汗が流れ、動悸で胸が苦しくなってくる。

『初芽七草様』

突然のメッセージ失礼いたします。

わたくし、同人サークル『サキュバスパレス』のサキュの宮です。

この度、初芽七草様にコミックフェスティバルで頒布する小説の執筆をお願いしたく、こちらのメッセージを送らせていただきました。

小説内容は、男性が負かされるサキュバスものの短編を三本。いつも投稿なさっているものと変わりはありません。その内の一本に、先日の『爆乳ロリサキュバスのお楽しみタイム』に加筆収録したものをに入れていただきたいです。

全体の大まかな内容は、サキュバスとの出会いから始まり、責められる場面、そして後日談というかたちを理想としております。プレイ内容やキャラクターの特徴は、すべてお任せいたします。初芽七草様の小説はどれも素晴らしく、そのアイディアに期待しています。

期限は受けていただいてから二ヶ月で（リメイク込みとさせていただきます）、文字数は五万字を予定しております。できる限り、一本ごとの文字数が同じになるよう調整していただきたいです。

それに伴い、お渡しする金額は七万五千円とさせていただきます。

ご納品時は、テキストファイルでもワードでも構いません。製本作業は、わたくしがさせていただきます。

完成時に、電子と紙媒体どちらの完成品もお送りいたします。

本文の最後に、わたくしのメールアドレスを記載させていただきます。

納期や報酬、その他ご質問があれば、何なりとお申し付けください。

ご検討、どうぞよろしくお願いいたします。

サキュの宮』

これって……ご依頼？ サキュの宮さんが、コミフェ用のエッチな小説を書いてくださって頼んできたのか？

しっかりと納期まで明記されているし、報酬が七万五千円だって！ 貯金額と大差ないんだけど……。

どう返事をすればいいんだ。

悩みに悩んだ末、キーボードを打ち始める。

『やってみたいけど、お金はもらわなくてもいいよ』

『友達からお金をもらうのは悪いとか考えてない？　これはお仕事。タダでやらせると私が悪者になるし。わかったらどうするか聞かせて。もちろん、私も手伝うから』
なんて愚かなことをしてしまったんだ。

「ごめん——」

届かないとわかっていても、謝らなければ気が済まなかった。

気持ちを切り替えて、咲ノ宮さんではなくサキュの宮さんへ送る文章を作成する。

『サキュの宮様

先日、フォローさせていただきました。初芽七草です。

この度は、わたくしにご依頼をくださいまして、ありがとうございます。

僭越ながら、サキュの宮様の作品制作にご協力させていただきます。

いくつか質問がございまして、書かせていただいたものに、サキュの宮様がイラストを付けてくださるというかたちでよろしいでしょうか。

また、コミックフェスティバル限定でしょうか。DL販売の予定はありますか。

初芽七草』

やると決めたからには、責任を持って最後までやり遂げる。

サキュの宮さんが——いや、彼女と読者が、満足できるものを書きたい。
信頼を裏切ることだけは、絶対にしないと心に誓う。

『初芽七草様』

お返事とご承諾ありがとうございます。

それでは、ご質問に答えさせていただきます。

まず、仰る通りで、初芽七草様がお書きになった小説に、わたくしがイラストを付けさせていただきます。

つきましては、『爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』のキャラクターイメージを教えていただけないでしょうか。また、こういうイラストが良いという要望を仰っても構いません。誠心誠意描かせていただきます。

次に、後日DL販売も予定しております。

それでは、期限の二ヶ月後までに、ご納品お願いいたします。

制作する上で困ったことあれば、何なりとお申し付けください。
サキュの宮』

やはり、あのサキュの宮さんが、僕のサキュバスをイラストに起こしてくれるようだ。夢のような展開に、身体全体がカァッと熱くなる。

参考にしてもらうために、頭の中に浮かんでいるキャラクター像を具体的に伝えなければ。もう一度読み返してみるか。

投稿サイトを開くと、一つの通知が――

『あなたの作品『爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』がR18男子に人気ランキング4位に入りました！ ぜひご確認ください』

「おお……！」

ランキング自体は何度かあるが、こんなに高い順位を叩き出したのは初めてだった。読者全員への大きな感謝とささやかな自慢を込めて、ランキング結果を呟く。

嬉しいことに、細川さんとサキュの宮さんが反応してくれた。特に、サキュの宮さんには感謝している。この結果は、彼女のおかげと言っても過言ではないのだから。

マイサキュバスのイメージが固まってくると、慣れない仕事用のメールで連絡する。どんなものが出来るのか非常に楽しんだ。サキュの宮さんが描くサキュバスを想像しながら、今日を終わりに……眠れるわけないだろ。

パソコンに向かい、どんな小説にしようか考えを練っていく。

圧倒的な速度で時間が過ぎていき、いつもの睡眠時間を余裕で越えてしまう。学校があることも忘れ、夜遅くまでキーボードを打ち続けて……。

「はあ……ふわあああ……」

お昼休みになっても、眠気が抜けずにいる。油断したら、すぐにあくびが出てしまうほどだ。

「大丈夫？ 朝からずっとそんな調子だけど？」

僕の体調を気遣ってくれる咲ノ宮さん。ありがたいけれど、原因は彼女にあるんだよな。正確には、夜中まで書いていた自分のせいだけだ。

「昨日遅くまで起きてて……」

「もしかして、あれやってたの？」

「うん……」

「やっぱり迷惑だった？ どうしてもキミにしてほしくて……」

どことなく申し訳なさそうな言い方だった。

「そんなことないよ。とっても嬉しかったし」

「ありがと。期待してるから。……それじゃあ、ご飯にしましょ」

「ん。わかった」

母が朝早くから作ってくれたお弁当を机に置く。

咲ノ宮さんの昼食は、昨日までのゼリー飲料ではなかった。コンビニで売られているおにぎり——ツナマヨ、梅干しとラベルが貼られたものだ。

「それ、好きなの？」

「どうなのかしら？ 安かったから買っただけよ」

「そうなんだ」

たしかに、一部の具材は手頃な価格になっている。ツナマヨや梅干し。あと、おかかも。値段が決めての人もいるはずだ。

そうして、二人一緒に食べ始めた。

「……………」

「……………」

いつもとは違う、夢にまで見た友達とのランチタイム。その高揚感はすさまじいもので……いやいや、会話が途絶えていてはダメだ。無言で過ごすなんて寂しすぎる。何か良さそうなネタを……そうだ！

「僕のあげるよ。好きなを選んで」

お弁当の交換を実施してみる。相手がおにぎりのせいで、一方的にあげる感じになっているが、似ている行為ができるだけで満足だ。

これを通して、もっと仲良くなれば——

「遠慮しておくわ。あ、嫌なわけじゃないから。これでお腹いっぱいになりそうで……ごめんなさい」

そう言われても――

「お願いだから、これ食べてみてよ。すっごく美味しいからさ。お母さんの作ったのは最高なんだって」

きんぴらごぼうを指しながら、自分の意見を強く主張する。

定番のたこさんウィンナーや玉子焼き、唐揚げ、一風変わったほうれん草のおひたしなども詰め込まれているが、一番好きなのがこれなのだ。咲ノ宮さんにも、ぜひこの味を知ってもらいたい。

「う、うーん……ちよつと箸借りるわね」

「え!？」

奪い取った箸で、咲ノ宮さんがおかずを口にする――

瞬く間に顔が朱に染まる。これは間接キスなんじゃ。体の熱で理性が溶け、穴が開くほど唇を見つめてしまう。

「うん! おいしい!」

素直な感想さえも、今の僕には届かない。

「ありがと。ん? 赤くなってるわよ。何かあった?」

間接キスに気づいていないのか、なんでそうなったのか尋ねてくる。何かあったじゃない。されたんだよ。

「どうして僕のを……」

「持ってきてないもの。借りないと、食べられないでしょ」

彼女の昼食はおにぎり。箸は必要ないし、持ってきてすらいらない。

きんぴらごぼうを食べるには、箸を使わないといけない。

だから、借りることにした。そんなの、考えたらすぐにわかることじゃないか。

「ああ、そういう……さっきの間接キスだって言いたいわけね」

先ほどの行為をようやく理解してくれた。だが、僕と違って平常心を保ったままだ。気持ちを見抜かれてよけいに恥ずかしくなってしまうが、首を縦に振る。

「私は別に構わないけど、キミはそういうのダメな人？ そうだったら、ごめんな……」
謝ろうとしていたところに口を挟む。

「大丈夫、大丈夫だから」

僕はただ、女の子の間接的にキスしてしまったことにドキドキしていただけ。そう
だ、友達であると共に、女の子でもあるんだ。友達意識が強まれば強まるほど、その

ことを忘れてしまう。

異性という事実が身に染みると、胸にちくりとした痛みが走った。だが、それも一瞬。特に気にするものでもなかった。

今日も、一緒に帰ろうと誘ってくれた。

これからこういう日が続くと思うと、幸せすぎて天に昇ってしまいそうになる。

「……ねえ？　なんだかぼーっとしてるけど……聞いてる？」

「え！？　ごめん。えっと……なに？」

「はあ……昨日の話で……」

昨日起きた出来事がたくさんありすぎて、どれがどれだかわからない。咲ノ宮さんの食生活が悲惨で、父親がいないと知ったことかな。ご依頼だろうか。ランキングだったり……。

考え込んだ結果、お金はいらないと言ったことだと勝手に判断した。

「そ、そうだよね。ごめん……」

あの発言で彼女を不快にさせてしまい、自分自身も情けなく感じた。謝罪の言葉が漏れるのは当然だ。

「なんで急に謝るの？」

「その……お金のことがなくて……」

「ああ、あれね。わかってくれたのなら、それでいいわよ。いらないって言われたときは、さすがに困ったけど……。働かすだけ働かして、給料あげない悪い店長さんになっちゃうでしょ」

その具体例で、どれほど酷いあやまちだったのか改めて痛感した。無給で働くと宣言していたようなものだったとは。

「この話はおしまいにして……よいしょと……」

カバンから、カバーで覆われた本が取り出された。おそらく、昨日の昼休みに読んでいたものだろう。『ヤンデレ妹に四六時中愛される監禁性活』っていうタイトルだったかな。

繋がった——会話の流れを理解できた。

「これ、貸してあげる。とても面白かったから、絶対気に入るはずよ」

オタクモードのときの約束は、嘘じゃなかったらしい。

エッチな小説を借りるというおかしなシチュエーションから、友達がいることの良さを実感する。

「読み終わったら、ツブヤイターに感想書いてあげて」

「えっと……それは？」

「作品名やペンネームで検索したときに感想があれば、嬉しくなるでしょ」

「……そうだね」

エゴサーチと呼ばれるものの説明をしてくれた。この行為は、悪評があって落ち込むこともあるそうだが、基本的には興味を示している眩きで、作品制作の原動力にもなるらしい。

「私は何回かあるけど、もしかしてやったことない？」

「あるけど……自分のしかなかった」

僕のような人がやっても、まったく意味がない。それどころか、知ってすらいらないのかな、無関心なんだとマイナス効果になってしまう。

「まあ、初めは誰だってそんなものよ。それより、書いてて困ったことある？」

話は、依頼でもある小説執筆に変わる。

「ない……かな？」

「本当？ 教えてくれないと私も困るから。ほら、言ってみて」

「……ごめん。その……どういのがいいのかわからないままで」

今までは好きなように書いていたけれど、頼まれてしまったからには、それじゃない気がする。流行に合わせるべきじゃ。そう考えてしまつて、全然進まなかった。「そうねえ……シチュエーションに正解なんてないと思うの。そんなものがあつたら、全員同じになっちゃうでしょ。好きなものでいいの——私だつてそうしてるから」

「う、うん……わかった」

パイズリ好きな作家先生は、パイズリばかり。本番嫌いのせいで、本番を書かない作家先生だっている。サキユの宮さんも、好きなものを描いているらしい。やっぱり、そうするのが一番なのかな。

「これで終わり？ 何でもいいのよ。キミの力になりたいし」

「じゃ、じゃあ……。でも、これはちよつとまずいかな……」

「いいって言ってるでしょ」

「その……なんで僕だったの？」

有名な人に依頼した方が、エロい内容になるに決まっている。人気もあるからたくさん売れるはずだ。

「知りたい？」

「知りたい……です」

「キミもいるんじゃない？　あまり認知されていないけど、応援している大好きな作家先生が……そういうことよ。でもね、本当の理由は、一緒に作品を創ってみたかったからなの。私たちって同い年だし、やってることも似てるでしょ。だからこそ、二人で何かをやったら楽しそうだって。それに、この機会にもっと仲良くなれたら……」
どうしてか、後半になるにつれ声量が小さくなっていく。心なしか、顔も朱く染まっている。その様子を見てみると、また胸がズキズキと痛くなってきた……。

それからというもの、会話は一切起きなかった。

帰宅後、すぐにパソコンに向かい、執筆作業に入る。暇なときに軽い気持ちでやる

のではなく、期日までに仕事を終わらせるという覚悟を持って。
ある程度時間が経ってから、ふと時計を確認する。もうこんな時間か。

「……ふう」

憩いの場であるツブヤイターを開くと、ダイレクトメッセージが届いていた。それ
を読むとしたけれど、一階から僕を呼ぶ声が聞こえてくる。

仕方ない。先にご飯を食べようか。切なさが残る状態で、階段を下りていく。

いつもならば、夕食の後にリビングでぐったりしている。しかし、今日はすぐに自
室に戻った。もちろん、知らせが気になっていたからだ。

通知を見る——案の定、サキュの宮さんからだった。

『初芽七草様』

先日、メッセージを送らせていただいたサキュの宮です。

『爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』のラフが完成いたしました。

ご確認、よろしくお願いいたします。

こちらでよろしければ、完成に向けて取り組ませていただきます。

それでは、初芽七草様の作品を楽しみにしております。
サキュの宮』

一枚のイラストが添えられていた。それは、先日投稿した小説のキャラクター——スク水爆乳ロリサキュバスだった。今回のコミフェで、頒布予定のものでもある。

「すごッ——！」

未完成でもすさまじい破壊力で、思わず感嘆の声が漏れ出る。爆乳を強調させる構図が、痛いほど股間に響く。しかも、爆乳とその持ち主の体型が不釣り合いで、よけいに胸の大きさを意識してしまう。このおっぱいには絶対に勝てない。パイズリされたい欲望が、一瞬で限界を迎える。

これならば、理想とする——否、それ以上のサキュバスになるに違いない。

迷うことなく承諾した。それから、他のイラストはサキュの宮さんの独断で書いてくださいとも伝えておいた。彼女の絵は、確実にストライクゾーンに入ってくるんだから、何も問題はない。

メッセージを送ってから、ずっと眺めていた。愛娘のアルバムを見るようにしなが

らも、クラスで一番性的な子を盗撮するような感じで。

イラストを脳内に保存してから、僕の小説を読んでもみると、エロさが一気に増し、イラストの力ってスゲーと思い知った。

これからもサキュの宮さんのめっちゃシコなイラストが付くとなると、楽しみ過ぎて体中の血液が沸き上がる。

そういえば、どんな状態で描いているんだろう。もしかして、淫らな方向に気持ち昂っていたり、女性の反応が完全に表れていたりするのかな。

軽く妄想してから、この感情は歪んだものだどと気付く。こういうことは絶対に考えちゃいけない。作家先生に性別の差なんて関係ない、そう言われただろ。

女性作家先生の作品を性的に見るのは構わないし、本人も喜ぶことだろうけど、先生自身に欲情するのはいけない。そのことを深く心に刻みつ、再度パソコンに向かう。

それから、さらに時間は流れ……。

「今日はこれぐらいでいいか」

昨日の反省を踏まえ、やりすぎを防ぐ。もう少し書きたくても自粛する。

「……んじゃあ」

高価な宝石を扱うような動きで、カバンから一冊の本を取り出す。そう、咲ノ宮さんに貸してもらったエッチな小説だ。

初めて友達から本を借りて、エロラノベ童貞を卒業する。二重の意味で緊張してしまう。

読み進めると、男女の営みを表した話が見られて、きわどさを通り越した挿絵もあった。

「うわああ……」

この声は、嫌悪ではなく興味や関心ということを自覚している。

文字を追うのがやめられない。ページをめくる手が止まらない。物語から離れることができない。

室内は、パラパラと紙をめくる音と、自分自身のいやらしい吐息が漏れるだけとなっている。

あつという間に一章が終わり、これからどうなっていくのかという期待が膨れ上がる。言わずもがな、体も完全に期待しきっている。

次いで二章、三章……とうとう我慢できなくなり、好みのシーンを読み返す。汚さ

ないように注意しながら。

いつの間にか、ラストまで行っていた。

全体的にエロかったけど、出すならこっちが発動したら、萎えてしまうんだよなあ。最後のエッチシーンでなら、逆に興奮するけど。

「そういえば……」

一旦本を置き、パソコンの前に座る。

感想を呟いておけば、作者のためになる。咲ノ宮さんから教えられた言葉だ。特にここが良かったと、百四十文字いっぱい使って表現する。

他のオススメも読んでみたいなあと思っていたところで――

「これって咲ノ宮さんも読んでいたんだよね？　これで……その……エッチな気分になっちゃったこと？」

僕しかない部屋で、ここにはいない彼女に質問する。当然答えは返ってこない。だが、あんなに絶賛していたんだ。この作品で愉しんでいたはず。そうになると、彼女のそういう姿を脳内に浮かべてしまっ……

「う、うう……」

またしても気持ちを抑えきれなくなってしまう。

先ほどと違い、サキユの宮さんではなく、咲ノ宮さんでの妄想だ。女性の作家先生ではなく、一人の女の子をネタにしている。

好きな子の性欲に溺れた姿を想像することは、女に飢えた思春期男子にとって日常茶飯事。罪悪感を覚えてしまうが、人間の本能には逆らえない。

あれ？ 僕は——咲ノ宮さんを好きだと思っている？

友達としてではなく、恋人として見ている？

友達の行為ではなく、恋人の行為を望んでいる？

咲ノ宮さんのことを考えれば、得体のしれない温かいものが胸の奥から生まてきて……。次第に呼吸が苦しくなり、頭もどうにかなりそうだった。

現状を理解できず、モヤモヤした気持ちのまま、ベッドに身をゆだねることにした。ちょうど日付が変わったばかり。普段の睡眠時刻だ。明日は体育の授業だし、今日みたいにあくびが止まらないなんてことは避けたい。

早い内に寝ようとしても、思考が咲ノ宮さんでいっぱいになっていて、なかなか寝付けない。

これから、友達として彼女と接することができるだろうか。